福山大学での留学経験が一冊の本に　―ブルガリアの元交換留学生が日本を紹介―



約 10 年前、ブルガリアのソフィア大学から交換留学生として福山大学で学んだ Ivelina Genkova さん（現 Ivelina Vazharova さん）が、このたび日本をテーマとした自身初の著書を出版しました。今回は、その出版に至るまでの歩みと、福山大学で過ごした一年間を振り返りながら、Ivelina さんの現在についてご紹介します。

本のタイトルは、“Japan: While I Was Learning to Be Far Away”（ブルガリア語題：„Япония: Докато сеучех да бъда далече“）。ブルガリア語で書かれた、日本の文化や伝統、日常生活、さまざまな場所や物語を紹介する一冊です。

この本が生まれる大きなきっかけとなったのが、Ivelina さんが福山大学で交換留学生として過ごした一年間でした。2015 年から 2016 年にかけて福山大学で学んだ Ivelina さん。留学中には、日本語スピーチコンテストにも挑戦しました。2016 年 2 月 28 日に開催された「第 24 回外国人留学生による日本語スピーチコンテスト」では、見事、最優秀賞を受賞しています。当時の様子は、福山大学のブログでも紹介されています。



【2016 年、「第 24 回外国人留学生による日本語スピーチコンテスト」で最優秀賞を受賞した Ivelina さん】

さて、Ivelina さんによると、本では、海外から見た日本の魅力を、よく知られたイメージだけでなく、日々の暮らしや小さな発見も含めて紹介しているとのことです。同時に、遠く離れた国で生活し、異なる世界を知る中で、自分自身についても新たな発見をしていく――そんな留学ならではの経験も、この本には込められています。

執筆だけでなく、調査、編集、書き直しを重ね、さらに出版過程でも出版社に任せるのではなく、自ら責任を持って取り組んだそうです。長い間パソコンの画面の中にだけ存在していたものが、実際の本となって目の前に並んだ時の感動は、言葉では表現しきれないものだったといいます。　そして、この本には福山大学とのつながりを感じさせる、もう一つの工夫があります。

表紙に描かれているのは「バラ」です。

ブルガリアは「バラの国」として知られています。一方、福山市も「ばらのまち」として、ばらを大切に育ててきた街です。Ivelina さんは、このバラを「ブルガリアと福山市をつなぐもの」と考え、本を象徴するモチーフとして表紙に取り入れました。

福山大学で過ごした一年が、その後も Ivelina さんの中に残り続け、約 10 年の時を経て一冊の本へと結実したことは、本学にとっても大変うれしい知らせです。

福山大学とブルガリアとの交流は、これまで多くの教職員や学生によって築かれてきました。一つひとつの交流が、その時だけで終わるのではなく、その後の人生や新たな活動につながっていくことを、今回の出版はあらためて示してくれています。

Ivelina さんからは、「福山大学は私にとって特別な場所」であり、今回出版した本をぜひ一冊、福山大学に置いてほしいとの申し出もいただいています。留学によって出会った国や人、文化が、年月を経て新たな形となり、再び福山大学へ戻ってくる――。Ivelina さんの本が、これから多くの読者の手に渡り、日本とブルガリア、そして福山をつなぐ新たな架け橋となることを願っています。